

助詞の使用頻度から見た中古日本語の特徴と訓点資料との関係

廉田浩

上代から中古にかけて、日本語（中央語）には相当の変化があったことが知られている。しかし、機能語等の用法変化については、必ずしもその原因が明解になっていない。実際に主要助詞の使用頻度を観察すると、通常の自律的通時変化では考えにくい変化形態のものがあり、その要因としては、人為的・社会的な現象が考えられ、その有力候補として、大量の漢文資料の導入とその訓読の（間接的な）影響が考えられる。本発表では、これらについて考察する。その際に、平安初期・後期に成立した訓点資料（訓点語）の助詞使用形態との対照が重要である。

平安初期までの訓点資料に関しては、①そもそも当時は漢文訓読体以外に書き言葉の標準が確立されていなかった点、②圧倒的な格差のある中国文化や思想の流入を日本語で受け止めるため、言語の整備や権威付けが必要であったと考えられる点、このような諸点を勘案し、少なくとも中古日本語書き言葉に対してある種「先導的役割」を果たした、即ち、漢文訓読が中古日本語の助詞の用法にも影響を与え、その変化に関与したのではないかとの仮説を設定し、これを検証する。和文資料としては、「日本語歴史コーパス：国立国語研究所」中の韻文と散文の代表的なものを選び、訓点資料としては、加點時期が平安初期のもの「春日正治(1969)『西大寺本金光明最勝王経古點の国語学的研究』勉誠社」と平安後期のもの「大坪併治(1968)『訓點資料の研究』風間書房」を選んで、主要な助詞、特に、格助詞ガ、係助詞ヤ・カ、係助詞ハについて、その用法や使用頻度の変化を定量的に分析した結果、少なくとも上代から中古のこれらの助詞の用法・頻度変化に関しては、訓点語の強い影響が推定されることが分かった。

特に初期訓点語での助詞の用法は、上代の古い時期の口頭語の用法に準拠している可能性が高く、以降の口頭語の助詞用法変化を反映した万葉集に対して、中古和文資料（韻文・散文を含む）では、初期訓点語の影響で助詞用法が一時的に時代に逆行変化し、この影響が薄くなった中古末から中世初に元に戻ったものと考えられる。